

Photo Space

記録・創造・交流のための

ロゴデザイン：富樫茂美

現代写真研究所

〒160-0004

東京都新宿区四谷 3-12 サホホビル 5.6F

03-3359-7611 (TEL) 03-3355-1462 (Fax)

<http://www.genken.ac>

jimukyoku@genken.ac

責任編集 金瀬 胖

禁無断掲載 許可なく作品の使用はしないでください。

Winter 2022・12.25 NO.11 「今年の写真、冬休み号」



飾り物の卸し屋さん「今年は景気悪いや」 2022年12月18日鳥越神社そば ©金瀬胖

視点があり、現研50年のプレ企画があり、第2回伊藤知己写真賞があり、コロナ対策があり、経営危機に多大なカンパをいただき、ほかにもいろいろなことがあって、はや年の瀬になった。ウクライナの大統領は「この闘いは世界のためにも負けるわけにはいかない」と来年への決意を表明した。コロナウイルスとの闘いは世界中の取り組みの連携があると思うが、中国の感染爆発が心配でならない。原発再稼働、軍拡、増税に走るこの国の内閣は、コロナ対策をふくめて、人の意見を聞くことも、現実を見ることも出来なくなっている。これは政治の世界の暗い話ではなくて、ほんとうに危ない。

こういう時は、知識人や文化人、言論の人たちが渾身の力を出して警告を発し、政敵と言われる人の間違いを正し、理解させ、国民的大運動が起きた。写真家も世界と日本の隅々、地べたを歩き、自分自身をふくめて、写真の眼、人間の眼を開くことをしてきた。そして危機を超えてきた。それが戦後の経験だった。今は、言論の人に言論がなく、いや少なくともその声は届かず、冷笑的に見ているだけではないか。そこにただいまの危機の深さがある。

現研は来年、創立50年を迎える。これを機に、自分は何を撮るか、初心に返り、本気で考えよう。いまは誰でも写真を獲れる時代だ。だから何を見るか、何を撮るか、なのだ。

写真を学ぶとは、これを見てくれ、と写真を指し出すことだ。見る人の声を聴くことだ。その写真に何が写っているか、写っていないかを正直に教えてくれる人に会うことだ。

では来年も PHOTSPACE をよろしく。

金瀬胖・教務主任

CONTENTS

平川正枝 宮崎悦子

林弘樹 川地素睿 原田敏朗

佐藤泰治 山本やす子

石田雅章 太田久雄 藤田篤男

とみたやすよ 木崎昭

清水康子 名倉正義 田中なみこ

中西勝彦 尾辻弥寿雄

榎本佳恭 金瀬胖



新宿御苑



三河島稲荷神社

平川正枝（飯塚ゼミ）

写真集「華神」より 一卷に思いを込めし伝えあり 妖気かもすや 蝶のひらりと



コロナ禍のなかの奈良 宮崎悦子 (英仲三連続講座)



林弘樹 (モノクロ暗室専科)



「7 × 14cmの青春」 川地素睿 (入江ゼミ・デジ研3)

ビルの壁にもたれて、携帯電話に話しかけている女の子。立ち食いうどんを食べて帰ってくるまでの30分。まだ話し続けていた。7 × 14センチの小さな通信機に彼女の青春が詰まっているようだ。～ネオン灯る前の池袋で～



「条件付き飛行」 原田敏朗（総合科 デジタル研究科 4）

7月初旬、鹿児島空港から屋久島に向かう飛行機は低気圧の影響で出発が遅れた。しばらく待つと「屋久島空港視界不良の場合は引き返すことがある」との条件付きで飛ぶこととなり、風雨の中を離陸した。プロペラ機は無事屋久島空港に到着。その後も天気は回復すること無く、屋久島での撮影は全日程（5日間）雨の中となった。



夜の住処 佐藤泰治（金瀬ゼミ）

「明るすぎる」「不自然だ」と、思った。街路樹、道路標識、電柱、街灯に囲まれた、「どこにでもある場所」にも、「違和感を感じる異次元のような空間」は、あるのだ。そこに、人は住んでいる。



「こんなところで!!」 山本やす子（講師）

玄関前の道路のひび割れに根を延し開花させる生命力、発見した時は驚きと感動で宝物発見！の心境だった。最初は一株だったが呼び寄せたかのように花色の違う株が増えた。昨年育てた花たちが種をこぼし、また開花するのは珍しくないが、近年、種は出来ても発芽しない処理がされているとか・・・



救国 石田雅章 (フォトジャーナリズム専科)

プーチンの蛮行により世界中が狂ってしまった2月24日。そしてロシアは張り子の虎であることが証明されてしまった。終末時計が「カチッ」と動くことが無いように みんな頭を冷やせ！



Only one 太田久雄 (OB)

久しぶりに、カメラを持って初夏の公園にでかけました。花壇の側を歩くと、黄色と深紅の花が「私を撮って」と強烈に訴えてきます。ガーベラでしょうか、花の種類は解りません。



終の棲家

藤田篤男（オンラインワークショップ）

定年を契機に夫婦で都会からこの地へ移住して間もなく原発事故に遭遇し避難指示を受けたが終の棲家と定めたこの地を離れることを拒み畑はススキが生い茂り、雑草が伸び放題に囲まれながら一軒だけの生活を続ける男性の表情を曇らせる。

撮影地 福島県浪江町

撮影年月日 2022年4月～11月



「懸命人生」 とみたやすよ 日曜撮影専科

たまには道を逸れそうになったり、過ちも犯したかもしれないが懸命に生きてきた。
墓地や住宅地を眺めるといつもそんな想いとらわれる。



「歳月」 木崎 昭 (日曜撮影専科)

もともとは何の店だったのか、想像を巡らせてみるが、ただ「幸福堂」という名前が当時を偲ばせるのみだ。

逗子葉山 2022年10月



再開発の波に吞まれる「小山湯」 清水康子（入江ゼミ）

三田一丁目再開発計画一帯で、ひときわ風格のある1921年（大正10年）に築造された木造銭湯の「小山湯」も年内で見納めとなった。



川崎石油コンビナート上空の飛行ルートの見直しを 名倉忠義（入江ゼミ）

2020年3月29日から運用された羽田空港の新飛行ルートは、川崎においては騒音（最大94db）の被害と川崎石油コンビナート上空で航空機部品の落下や航空機事故が発生した場合、コンビナート火災・爆発は2500mの範囲に及ぼす大惨事になると想定され、コンビナートの労働者や地域住民の避難は困難であると指摘されています。2011年3月の東日本大震災で発生した地震の影響で千葉県市原市のコスモ石油のパイプラインが損傷し発火。その後タンク本体に延焼・連続的に爆発し11日間可燃物ガスが燃え尽きるまで消化は出来ませんでした。世界に類のない危険な飛行ルートを2020年3月以前のルート、海側から着陸し海側に向かって離陸するルートに早急に戻させなければなりません。



迎賓館～静かな夕暮れ

田中なみこ（入江ゼミ）

歴史ある迎賓館は今も華やかさと輝きを放ち、私達の心を過去へと運び癒してくれる。静かな夕暮れのあと夜明けが来るように、世界平和と明るい未来が訪れることを願いたい。



変わらぬ駅への路



明治初期からの墓参「花屋」



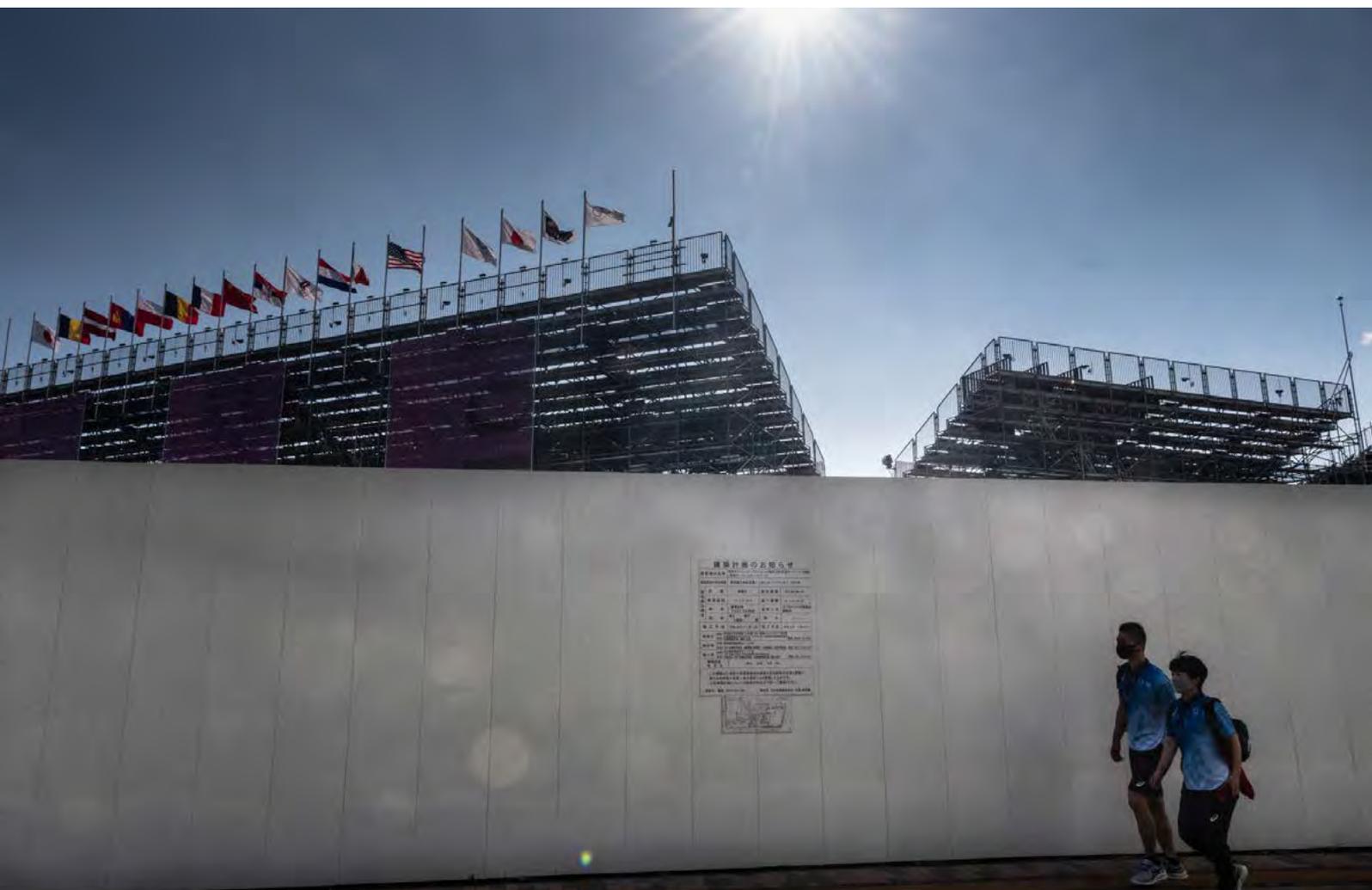
ふるさと谷中 中西勝彦（入江ゼミ）

「今年の1枚 塀の向こうの TOKYO2020」 尾辻弥寿雄

「東京オリンピック」とは何だったのだろうか？ 今になって思い返すと何も出てこない。国民にとってオリンピックはTVの中であり、塀の向こうの出来事であった。日本選手の活躍をあおるだけ煽り一瞬燃え上がったように見えたが、閉会すると一瞬のうちに消えてしまったのである。やはり国民生活とは無関係の話であった。

オリンピックを大義名分にして税金を湯水のようにばらまいた結果、今頃贈賄がポロポロ出てくるが、組織委員会は解散しているから何にもわかりませんと知らぬ顔である。税金の使い方など検証するというが、この点も塀の向こうである。

①開会式は金網の向こう ②競技場は塀の向こう ③華のマラソンも応援団はちらほら





小学5年生・田植え経験 榎本佳恭（入江ゼミ）

昔の風習を残すために継続的に田植えから収穫までを行っている東京郊外。もち米の田植えを行う子供たち取材しました。

東京都三鷹市が管理しているぼたるの里





Dry Garden 鈴木知之（講師）

都会の街を歩いていると、洒落たカフェやブティック、美容室など、必ずと言って良いほど観葉植物の植込みがあったり、センスの良い鉢植えが飾られている。冷たく硬質な都市建築に、柔らかで自然な表情を与えている。それは美しく洗練されていて、人にも優しいのだけれど、どこか気取っていて、なぜかみな乾いていて、もともと湿気の多かった日本では、まるで外国のように見える。そんな外来植物たちの「Dry Garden」の街は、今日も若者たちで賑わっている。



銀杏のリボンの少女 金瀬胖（講師）

神宮外苑というと私らの年代の者には早慶戦と学徒出陣のイメージが強くある。世の中怪しい雰囲気なのと樹木伐採が取り沙汰されているので出かけてみた。絵画館前の大きな階段に、銀杏の葉をリボンのように付けた女の子を抱いた爺さんが座っていた。かわいいので声をかけるやいなやレンズの近接限界まで近づいて1枚だけ撮らせてもらった。やはりピントが届かない。トリミングなし。プリントしてみれば子供のすこし不安そうな目の背後の階段からだれか降りてくるような感じがする不思議な写真になった。

神宮・絵画館 2022年12月4日